

# 老神神社(人吉市)

ここが老神神社/鳥居に「老神社」と記された神額が掛かる



前方は拝殿で、その奥が本殿/その前面右手に神供所が接続する/本殿と拝殿・神供所が鍵の手に並ぶ、この地方独特の形式/共に重要文化財



相良一族  
御産宮

# 老神神社由緒書

御祭神（鹿児島県霧島神宮同体）

天照大神の御孫・天孫降臨の神

一、瓊瓈杵尊

【ニニギノミコト】

瓊瓈杵尊の御子（山幸彦）

二、木花咲耶姫命

【コノハナサクヤヒメノミコト】

瓊瓈杵尊の御妃

三、彦火火出見尊

【ヒコホホデミノミコト】

瓊瓈杵尊の御子（山幸彦）

四、豊玉姫命

【トヨタマヒメノミコト】

彦火火出見尊の御妃

五、火須瀬理命

【ホスセリノミコト】

瓊瓈杵尊の御子（海幸彦）

六、火照命

【ホデリノミコト】

瓊瓈杵尊の御子（海幸彦）

御鎮座 大同二年（八〇七年）  
祭禮日 十一月二十六日



境内社

淡島神社（健康の神）

弁財天社（芸能の神）

稻荷神社（商売の神）



御由緒

現在のご社殿は、江戸時代初期の寛永五年（一六二八）相良二十代長毎の命により、ご造営されたものです。

これより以前、この場所は球磨川に面した山深き所で、その中に小さな祠があるだけでしたが、相良一族が古来より御産宮と信仰してきた神社であり、寛永の初め山を開き平坦な地とし、このような立派な社殿が造られたといわれています。

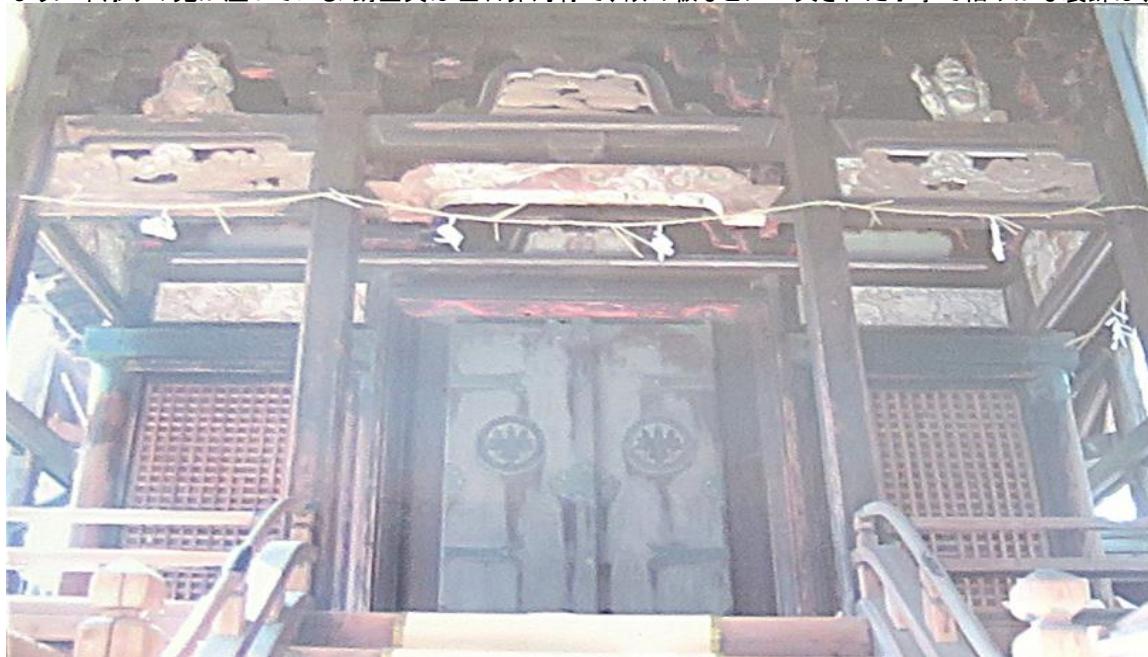
本殿は、茅葺きの覆屋に護られた正面三間の、球磨地方には珍しい入母屋造りで、正面、左右の三方に高欄つきの縁をめぐらせ、内陣には円柱が用いられています。

柱頭には禅宗様式の組み物、壁には花鳥の彫刻が施され、特に左右脇の間の虹梁に鬼が座り屋根を支えている姿はたいへん珍しく、優れた意匠であることから、昭和三十七年に県の重要文化財に、平成二年には国の重要文化財に指定されています。



説明板/寛永5年（1628年）、相良藩主・相良長毎（ながつね）によって建てられた

建築様式や壁の装飾などに桃山風の手法が用いられ、特に本殿は柱頭に禅宗様式の組み物、壁には花鳥の彫刻が入れられ、弓なりの形状を見せる梁の上には屋根を支えるように木彫りの鬼が座っている/鎌金具は左右非対称で、嵌め板などに工夫された丁寧で細やかな装飾は、人吉球磨の独特的手法と言われている



別の説明板



老神神社は霧島神社を勧請したと伝えるが、創立年代は不明。現在の本殿は、江戸時代のはじめの寛永5年（1628）人吉藩主相良長毎とその子頼尚によつて相良氏一族の産宮として再興されたもの。拝殿および神供所は元は茅葺きの鍵屋になつたものを、近代に切り離したもの。

藩主の産宮として造営されたため、漆塗り、彩色を施した豪華な造りに加えて、嵌め板等の細部にこの地方特有の意匠が見られ、球磨地方を代表する江戸時代前期の神社建築として価値が高い。

正面が拝殿/右手は神供所

[video](#)



「老神社」と記された神額



拝殿から本殿方向を見たところ/拝殿は奥行が長い



本殿の覆屋/立派な茅葺き屋根

[\[video\]](#)



覆屋の中の本殿妻側を見たところ/正面3間、側面3間/柿葺/入母屋造/小壁の浮彫付きの嵌め板や、透かし彫の蟇股・格狭間などに極彩色が施されている



反対側に回って、正面の平側を横から見たところ



その上部を見上げたところ/海老虹梁も見える/その左手の木鼻は禅宗様の繰形



その右手を見たところ/台輪の上に大斗がのる/組物は出組/木鼻は禅宗様の縁形/軒支輪が付く



さて、この参道の真ん中に立つのは基礎から笠まで全てが八角形の石燈籠/左手に説明板がある



# 八角形の石燈籠

神社の燈籠は普通は参道を挟んで一対で建てられている。しかし、この燈籠は参道の真ん中に建てられ、神域との結界を表示する人吉球磨には類例のない珍しい建て方であり、京都、奈良の社寺に見られる燈籠の配置と同じである。また、燈籠は四角、六角、円形の形式が多いが、この燈籠は基礎から笠まですべて八角形である。八角形の燈籠は他に青井阿蘇神社に建立されている。青井阿蘇神社は江戸時代の中期になると、神仏習合の信仰から吉田神道の信仰形式に改められた。その際京都の吉田神道と関係の深い八角形の形式を燈籠に用いたと思われる。因みにこの燈籠の銘文は

「奉寄進 板屋 寛延三（一七五〇）庚午十

月吉日」である。

